

海越えて伝わる魅力

奇想の絵師、河鍋暁斎の名声は海を越えてヨーロッパにも伝わった。19世紀末のフランスでは日本の代表的な画家として北斎に次いで称賛されていた。江戸・明治の絵画に詳しいフランス人の美術史家で、日仏会館フランス事務所長のクリストフ・マルケさんが暁斎が海外で評価された歴史をひもといた。(文化部・田尻秀幸)

暁斎を語る

下

日仏会館フランス事務所長

クリストフ・マルケさん

「暁斎は大英博物館で展覧会が開かれるなど、日本以上に海外で評価された。」

「暁斎が初めて評価されたのはフランスです。1876(明治9)年に、日本の宗教を調査しようと、実業家のエミール・ギメと画家のフェリックス・レガメが来日しました。パリでは北斎が有名だったこともあり、実際に日本で活躍している画家に会おうと暁斎を訪ねたのです。」

「どんな風に彼らは暁斎を知ったのか。」



暁斎が海外で受け入れられた歴史を語るマルケさん＝東京都内

クリストフ・マルケ 1965年フランス生まれ。日本近世・近代美術史と出版文化史が専門。フランス国立東洋言語文化大教授。編著に「日本の文字文化を探る―日仏の視点から―」など。2015年に欧米で初めて大津絵を研究した著書が出版。

作者名知らずとも感動

批判した作品と受け止め、宗教の権威に屈しない反骨精神のある画家として興味を持ったのです。基になったのはこ

とわざですから、小さな誤解

した」と語っているようです。確かに舌禍事件などで牢獄に入っているのですが、これは大げさですね(笑)。いろいろな誤解があったかもしれないけれど、彼らにとって暁斎は印象的な画家だった。帰国後のギメは著書『日本散策』で数ページにわたって暁斎を紹介し、フランスでの知名度を高めました。自身が設立したギメ美術館にも暁斎の絵を収蔵しています。

「フランスではどんなところが魅力的だったのでしょうか。」

「文明開化の時代ということもあり、日本では西洋の技術が美術にも輸入された。フランス人に当時の日本人の絵

「『百鬼画談』は暁斎にとって最後の作品。色彩も斬新

「上」は2日、「中」は9日に掲載しました。

から始まったと言えます」

は模倣のように見えたでしょう。でも暁斎は日本の伝統を守った。当時の美術史家ルイ・ゴンズは「私から見ると、彼の最も偉大なところは、ヨーロッパにはかぶれず日本的な美意識を全うしたことにある」と言っています。

「どれほど人気があったのか。」



「日本散策」で描かれた暁斎

前期展18日まで

「鬼才―河鍋暁斎展 幕末と明治を生きる絵師」前期展は18日まで。後期展は20日～8月7日。月曜休館。開館時間は午前9時半～午後6時(入室は同5時半まで)。観覧料は一般1200円、大学生900円。県水墨美術館と北日本新聞社でつくる実行委員会、河鍋暁斎記念美術館主催。

文化 bunka1@ma.kitanippon.co.jp